

2. シラバス・スタディガイド*1

川崎 勝*2

1. はじめに

本白書の随所で詳説されているように、90年代後半以降、日本の医学教育の世界では抜本的な改革が進行中である。同時に、医学教育をその一部に含む日本の高等教育システム全体もまた大規模な改革が行われつつある。そして、FDと並んで、高等教育改革を象徴する存在がシラバスである。日本において、90年代前半までは、大学人の間であってさえもシラバスはその存在をほとんど知られていなかった。しかし、現在ではシラバスを備えていない大学は極めて稀であり、中等教育レベルでさえも、先進的な中・高等学校であれば積極的にシラバス作成を謳うようになってきている。本節では、シラバスをめぐるこのような状況の変化を振り返るとともに、ヨーロッパ（特に英国）の医学教育において学生の学習の補助具として注目を集めつつある、スタディガイドを紹介する。

2. シラバス～日本とアメリカ～

日本でシラバスの普及が一挙に進んだのは、大学教員の自発的な教育の内容や方法を改革するための継続的努力の成果というよりも、日本の大学が置かれた外的環境の変化によるところが大きい。具体的には、90年代初頭の大学設置基準の大綱化（これにより、大学の教育課程編成の自由度は増大した）とセットになった「自己点検・評価」の義務化を嚆矢とし、現在に至るまで継続している、一方で各大学の自由度を増大させつつ、他方で大学を厳しい競争的環境に置くという両面

的な高等教育政策である。また、2004年に導入された認証評価制度の下で、シラバスは大学がそもそも評価を受けるに当たって不可欠の存在になったことも大きな要因である。大学当局としては否応なしに学内に号令をかけ、シラバスの作成・充実に取り組みざるを得ない状況が生じたのである。このため、シラバスの作成者である大学教員の間で、「シラバスとは何か」という一番重要な点に関する検討と理解が不十分なままアライバイ作りにシラバスは作成されてきた。

日本でシラバスの普及を強力に推し進めた行政当局（当時は文部省）の文書に明確かつまとまった形で「シラバス」が登場するのは1995年（平成7年）版の「我が国の文教施策」の第I部「新しい大学像を求めて—進む高等教育の改革—」においてである。そこでは、こう述べられている。

シラバスとは一般に授業計画を指す。従来、我が国の大学では、学生の授業科目選択に際しての「履修要項」等により授業科目の概要の紹介がなされることはあった。しかし、各授業科目のねらい、授業の概要、1回ごとの授業内容、教科書・参考書、成績評価の方法・基準等について具体的な記載がなされているような詳細な授業計画（シラバス）をあらかじめ作成し、公表する試みは一般に行われてこなかった。

（中略）

シラバスを作成・公表することの効果として、まず、学生に授業の内容について事前によりよく認識させ、計画的・体系的な授業科目の選択、積極的な授業参加を促すことが期待される。また、教員に対しては、言わば授業の設計図であるシラバスを公にすることを

*1 Syllabus and Study Guide

*2 Masaru KAWASAKI 山口大学医学教育センター

通じ、自己の授業内容の一層の向上に向けての努力や体系的な教育指導の充実に向けての教員相互の連携・協力を促進することが期待される。(同第2章第1節「2 授業の質を高めるための様々な工夫」より)¹⁾

シラバスは「授業計画」と位置づけられた上で、従来から存在した「履修要項」等との違いは「各授業科目のねらい、授業の概要、1回ごとの授業内容、教科書・参考書、成績評価の方法・基準等について具体的な記載がなされている」という詳細さ(量的充実)にもっぱら求められている。教育目標と評価方法・基準の明確化を謳った点は目新しいが、力点は、授業紹介の詳細版というところにある。現時点でも大多数の大学教員のシラバスに関する一般的な認識はこの水準であろう。

これに対し、教育社会学者の荻谷は、早くも1990年代初頭の段階で、自らの体験を踏まえた上でアメリカのシラバスについて詳細に検討し、それが果たしている機能の観点から、シラバスは(1)事務的連絡文書、(2)法的契約書、(3)学術情報(レファレンス)文書、(4)学習指導的文書の4つの性格を有すると分析している。そして、シラバスが(その日本的理解とは異なり)単なる詳細な授業紹介ではないことを主張している²⁾。さらに荻谷の分析の秀逸な点は、アメリカのシラバスはアメリカ固有の高等教育のシステムと文化の総体に根ざし、その総体と有機的に関連し合ってはじめて効果を発揮していることを剔抉している点である。

荻谷の分析を元にすれば、シラバス以外の日本の高等教育のあり方は元のままで、形式的にシラバスだけを移植してもそれがアメリカと同様には機能し得ないことが明らかである。この点は、上記引用部の後半において、シラバス作成・公開の効果として行政側が列挙している諸項目からも読み取ることができる。学生に対する効果として授業科目選択の便宜の向上と積極的授業参加の促進が挙げられてはいるが、行政側がより強く意図しているのは教員側の意識改革であろう。FDと並んで、シラバスには教員の意識改革のためのツールとしての役割が強く期待されているのである。

このため、学生の学習支援ツールという観点が相対的に等閑視されやすい。実際、学生への効果は、科目選択という履修開始前の効能や積極的な授業参加促進といった抽象的なもののみが挙げられている。アメリカのシラバスが(学習プロセス全体を通じての)「学習指導文書」としての役割が一番強く期待されていることと対照をなしている。

3. スタディガイド

それでは、「学習指導文書」とはどのようなものであろうか。

アメリカのシラバスは多様性が強く、一般論は困難である(医学教育の分野に限定しても、大学によって内実は大きく異なっている)。また、各大学・学部・学科の実情に応じて実践的であることに重きが置かれ、ほとんど理論化もされていない。これに対し、90年代以降、スコットランドのダンディー大学のHardenを中心としたグループが、シラバスでいう「学習指導文書」機能を中心に、医学教育分野の学生の学習支援ツールとして理論的に発展させ、定式化したのがスタディガイドである³⁾。

スタディガイドは、アウトカム基盤型カリキュラムを前提とし⁴⁾、図1の概念図に示されるように、学生がカリキュラムの多様な構成要素(学習環境・内容・方法・評価等々)と積極的に関わっていくためのツールと位置づけられている。具体的に、どのように学生の学習を支援するのかといえば、1)学習をマネジメントするツールとして、2)学習に関連した諸活動に焦点を与えることによって、3)学習の主題に関する情報を与えることによってである。1)のカテゴリーには、授業科目の概要、アウトカムと内容、学習方略、評価等々が含まれる。2)のカテゴリーは、明確な指示を伴ったワークブック的な機能であり、学習記録をとったり、学生が自己評価を行ったりすることも期待されている。3)は参考文献を示したり、教科書や論文の抜粋等を提示したりする機能である。

スタディガイドのより詳細についてはHardenらの原論文にあたっただけであれば幸いだが、ここでは具体的シチュエーションに応じた一定範囲

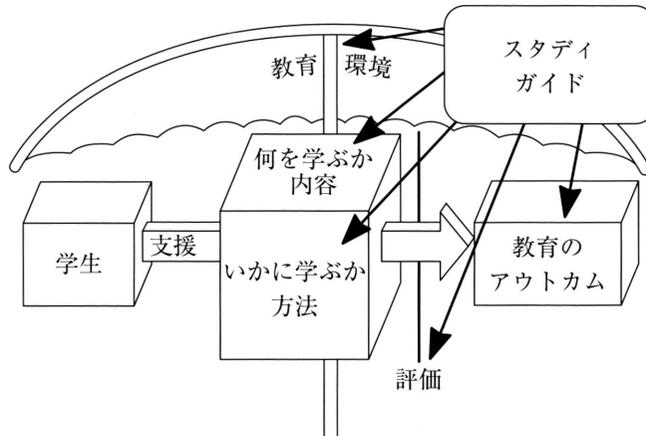


図 1

の多様性を許容しつつ、学習プロセス全体を通じた学生の学習支援ツールというスタディガイドの理念型が明確に提示されている。

4. 日本における展望

日本の医学教育の分野に関しても、多くの大学がシラバスの名の下に既に様々な努力を積み重ねている。他方で、前述のように「シラバスとは何か」という点の共通理解を欠いたまま、形式的にアメリカ式のシラバスの枠組を導入したため、「学生にどのように活用してもらい、どのように学生の学習を支援するか」という側面が弱いことは否めない。また、アメリカ式のシラバスが日本の医学教育のシステムや文化に適合しているかという根本的な点の検討も不十分である。

こうした点を顧みたとき、Hardenらが定式化したスタディガイドのモデルは極めて魅力的である。この概念モデルを活用しつつ、日本の医学教

育システムに適合した日本式のシラバス（名称は、「シラバス」でなくとも全く構わないが）のモデルの確立を急ぐべきであろう。

■文 献

- 1) 平成7年度我が国の文教施策 [第1部 第2章 第1節 2] http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_016.html
- 2) 苅谷剛彦. アメリカの大学・ニッポンの大学～TA・シラバス・授業評価～, 玉川大学出版部, 東京, 1992.
- 3) Harden RM, Laidlaw JM, Hesketh EA. AMEE Medical Education Guide No 16: Study guides – their use and preparation, *Med Teach* 1999; **21**: 248-65.
- 4) Harden RM, Crosby JR, Davis MH. An introduction to outcome-based education, *Med Teach* 1999; **21**: 7-14.